

要求したのです。しかし加害者は、もとは中小企業の社長でしたが、経営に失敗し、破産宣告をしたばかりでした。それで支払能力がないとわかると、やけどをした女性は、教会の敷地で起こった事故だからと言って、教会を訴え、1000万円を教会に要求し、裁判になってしまったのです。

こういう意図しない事故から、訴えられて、時には法外な請求を突きつけられることがあるのです。社会は決して寛大ではありません。それが現実なのです。それを思うと、3500年前のイスラエル社会において、意図的にではなく、誤って犯した罪に対してこれほど行き届いた親切の道が準備されていたことに私は驚きます。

もちろん誤って犯した罪であっても、無条件でゆるされたわけではありません。彼らは死ぬまでその町にとどまるほかはありませんでした。しかし、復讐者の手に渡ることもありませんでした。

「逃れの町」の3つの意味

1. キリストを表す

いったいこの「逃れの町」は何をあらわしているのでしょうか？ それは第一に、「私たちの神であり、キリストです。」詩篇は歌います。「あなたは私の隠れ場、あなたは苦しみから私を守り」また讃美歌作者は、「岩なるイエスはわが身を、みもとに引きあげ、裂け目の中に安けく、隠まいたまえり」と。父なる神も、イエス・キリストも、その最大の働きは、私たちの隠れ場であり、「逃れの町」であるということではないでしょうか？ 辛いとき、悲しいとき、人に責められるとき、失敗したとき、どうしていいかわからないとき、私たちが向かうべきところは、この「逃れの町」です。四国ほどの小さな国に六つの「逃れの町」をつくることを命じ、さらにもう三つをつくるように命じられた神は、自ら、多くの人を受け入れ、赦すことに熱心な神であると思います。私たちは、へりくだって、ただ、父のもとに行きさえすれば良いのです。へりくだってイエスのもとに行きさえすれば、救いはそこにあり、希望はそこにあるのです。どんなときも神のもとに帰りさえすればよいのです。「逃れの町」は遠くにではなく、常に近くにあるのですから。

2. 心の動機を区別する

第二に、「逃れの町」の規定から学ぶのは、「罪には意図的なものと、誤って行なうものがあり、神は、両者をはっきりと区別なさる」ということです。

意図的罪であれば厳罰に処せられます。しかし誤って犯した罪であれば、そのためには逃れの場を神は用意されたのです。このように神は、すべてのことにおいて動機をご覧になる方です。どんなよいことも動機が悪ければ評価されません。イエスは言われました。「その日には大ぜいの者がわたしに言うでしょう。主よ。主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇跡をたくさん行なったではありませんか。しかしそのとき、わたしは彼らにこう宣告します。わたしはあなたがたを全然知らない」と(マタイ7章

21節～23節) イエスは動機をご覧になるのです。反対に、たとえ目に見える業績はなくても、動機がよければそれは覚えられるのです。英国の詩人、ブラウニングは言いました。「われらが、善について欲し、望み、夢みしすべてはあり続ける」と。どんな小さな善でも、ただひとつの善でも、それが善であるかぎり、それは決して消えない。失われない。消滅しない。永久にあり続けるのだと。

たとえ実現できなくても、そう望み、夢見ただけで、それらの思いはむだではない。神に覚えられている。私たちにこの信仰があるからこそ、倒れても倒れても、もう一度起き上がり、前進しようとするのです。その信仰こそが、私たちに善を行なうことへの情熱を与えるのではないのでしょうか？ このように神は、動機をご覧になるのです。

3. 復讐の連鎖を断ち切る

第三は、「逃れの町」は、誤って人に危害を与えた人を復讐から救っただけでなく、復讐者による新たな殺人を阻止することにも役立ちました。神は、誤って犯した罪には寛大でも、計画的、意図的罪には厳しいのです。復讐者による殺人は意図的罪です。彼は計画的に、待ち伏せて、その人を殺すのです。神は「逃れの町」をつくることによって、無謀の血が流され、復讐者が意図的な罪を犯すことを防がれたのです。こうして神は、イスラエルの中から、復讐の連鎖を断ち切ろうとなさったのです。新約聖書によれば、復讐は禁じられています。それは神のなさることだと。むしろ聖書はこう言っています。「悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい」復讐がいけないのは、相手だけを糾弾し、自らを義としているところにあります。しかし正しい人などひとりもない。正しい方は神だけである。したがって復讐は神だけができるのです。

私たちは何と簡単に復讐の態度に出ることでしょう。不当に扱われたと思うと、もう我慢できないのです。しかし神は復讐を禁じられました。では、復讐をしないとは、どういうことでしょうか。それは、相手を、「逃れの町」に逃がしてやるということなのです。私たちが意図的に傷つけようとする人は、必ずしも多くはありません。私たちが弱くて、傷つきやすいから傷つくのです。しかし傷つく私たちがすぐに思ってしまう。「ゆるせない！ あんな人とは知らなかった！ もう口をきくまい、かかわるまい！」と。でもそれは復讐です。そういう復讐の気持ちを持ち続けて私たちの心が平安であるはずがありません。

そこで神は言われました。「約束の地に入ったら、逃れの町を六つつくるように。そして後に占領地がひろがったなら、さらにそこに三つの「逃れの町」を追加し、合計九つの「逃れの町」を設けよ」と。私たちはどうでしょう。私たちが、自分の心の中に、できるだけ多くの「逃れの町」をつくるべきではないでしょうか。それはあやまって私たちが傷つけた人たちを、そこに逃がしてあげるためです。

彼らが領土の拡大とともに、「逃れの町」の数をも増やしていったように、私たちも、人間的成長とともに、自分の心の中に、「逃れの町」を増やし、もっともっと寛大な精神を学ぶべきではないでしょうか。■